大寄 おおより こより 小寄

真宗大谷派（東本願寺）
小松教務所
〒923-0904
小松市小馬出町２６
Tel 0761-22-0555
発行者 保木 悦雄
編集 小松教区教化委員会

お同行さん

～あなたの隣の門徒さん～

小松市長崎町 石田 勉 さん（80）

4月の組門徒会役員改選で板津組の副会長になられた石田さんに、板津組門徒会研修の終了後お話をうかがった。

71歳の時に老人会長を引き受けることになり7年間務められた。老人会の活性化は元より町内のことにも貢献され、その働きぶりは非常にパワフルだ。また、「教材というものは自分の近くにある。勉強すれば分かってくる」と話される石田さんは、色々なことに関心を持たれ、物の見方や気づきがとてもユニークである。

石田さんは、幼いころからお寺の報恩講に連れられて行っていたそうでお参りにはご縁があった。その当時はお寺に参拝の人が溢れていたものだが、近年になって長崎町でも昔からのお講がほとんどなくなってしまった。そこで、12月の物故者追悼法要の時に老人会のお講を行うことにして復活させたという。老人会長をやめた今、「役をしたことで人の交流と物事が分かってくる」と、言葉に実感がこもる。

お寺（長崎町真入寺）の役員になったのは、親鸞聖人七百五十回御遠忌法要を契機に住職さんからすすめられた時。同級生たちと一緒に役員になり相続講のお世話もされている。

長崎町の同級生が全員でお寺の役員を務めるという受け継ぎにしていくそうだ。石田さんは、仏法に関してもよく勉強され、「仏法から学ぶことが沢山ある」とおっしゃる。そして、まず本山に行くことが大切と、親鸞聖人御遠忌、十二日講門徒会の本山和敬堂へのお内仏寄進、新門首継承式のご縁で本山に参詣され、宗祖の真実に生きる教えに深い感銘を受けられた。それ故に昨今のお寺から足が遠のいている様子を見て、とても残念に思われている。

「我々の真（まこと）はあやふやなもんや。縁や時間によって変わってくる」と語られる石田さん。一つ一つのことに丁寧に向き合い、力を尽くすことを教えてくださった。

あなたのお手元で情報をチェック！
小松教区ホームページ

大寄小寄バックナンバーはこちら

HPはこちら

【教区教化事業のご案内】
コロナ感染拡大に伴う対応等により急遽変更される場合があります

◇十二日講 毎月12日9時半～
【10月】伊藤俊作氏（靜光寺）
【11月】山本龍昇氏（大聖寺教区上宮寺）
【12月】波戸章氏（高岡教区 大福寺）

◇日曜講座
毎月1・3日曜9時半～
【10月】3日・17日
【11月】7日・21日
【12月】5日・19日

◇同朋の会報恩講
12月17日（金）
テーマ 親鸞放浪記
講師 尾畑 文正氏（同朋大学名誉教授）

＊以上、会場の記載の無いものはすべて小松教務所（常磐会館）
＊詳細はお問い合わせ下さい

うららのお寺

正雲寺 しょうううんじ

～小松市本鍛冶町～

門を通ると左手に地域の方が置かれた「福石猫」が迎えてくれる正雲寺は、紀州の真言宗根来寺（ねごろじ）の玄龍和尚が市内別地に草庵を建てたのが始まりとされている。「根来から来た御坊さん」が転化して「猫のご坊さん」と呼ばれるようになったと言われている。

正雲寺には小松指定文化財の絹本着色の聖徳太子絵伝二軸が所蔵されている。鎌倉期の格調高い画風を伝える絵伝は聖徳太子の誕生から崩御・埋葬までのご生涯を描いたもので、正雲寺では聖徳太子の遺功をしのび、毎年3月に太子講が勤められている。

近年には近隣の商店会が町おこしを兼ねて「猫の御坊通り商店会」に改称。その際に「福石猫」を正雲寺に置いたことから始まり、今では商店街のあちらこちらに20個ほどの「福石猫」が置かれ人気を博している。

長年支えてこられた前住職がご高齢などで法務ができなくなり、後継者に悩んでいたところ、遠い親戚にあたる現住職の青森直樹氏を今年4月に迎えることとなった。

青森氏は小松市光林寺の次男として生まれ、大学卒業後にある廃寺になった寺院を訪ね、その変わり果てた様子に落胆し、お寺を絶やしたくないと強く思ったそうだ。真宗法義相続の一翼を担い、地域の方々からも親しまれているこの正雲寺を守りたいという一心で住職就任を決断された。

新住職として今までの当寺の取り組みを踏襲しつつ、寺を守ってこられたご門徒さんと新たな関係を築き、正雲寺の今後の発展のために尽力していきたいと決意を語っておられた。

郡中の小窓

「地獄に堕ちる」何処から地獄に堕ちるのですか？
「信心が足りない」そう言うあなたは何者ですか？

数年前の年賀状に記した言葉です。《あなたは地獄に堕ちる》と言う人が立っているのは何処なのか。他者に平気で「地獄に堕ちる」と言う人がいるのは勝手に作った中間地点ではありません。「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」（『歎異抄』聖典六二七頁）

力強い宗祖のお言葉が思い出されます。

また、《信心が足りない》と言う人は何者なのか。信心を絶やさぬよう努めることは大切ですが、何を根拠に信心を量で分別するのか。「ただ念仏のみぞまことにておわします」（『歎異抄』聖典六四一頁）

宗祖のお言葉の前後をしっかりと読み返さなくてはなりませんね。そう考えれば、惑わされる必要は全くないのです。

小松教区教学研究室
『郡中学舎』研究員 加藤彰教

真宗本廟収骨

本山本廟部長　近松誉
小松教務所長　保木悦雄
小松教区広報部門　山内譲

「収骨の意義と、私たち真宗門徒にとって真宗本廟とは何か」をテーマに本廟部長の近松誉氏と教務所長の保木悦雄氏に伺いました。前号に続き内容を掲載します。

山内　代行というのは、おそらく小松と大聖寺教区だけの取り組みだと思いますが、本山での受け止め、あるいは他の教区の反応などありますか。

近松　本来は直接本山へお越しいただいて、収骨していただくということでしょうけど、こういう状況ですので、非常に苦心、苦慮されて代行という形をとられているということだと思います。

実は保木所長からお預かりするときに、普段と違う緊張といいますか、遠くにあればあるほどみなさんの思いというものが我々本廟部の職員にも伝わってきますし、そういうところで大切なお仕事をさせていただいているなということを改めて感じています。

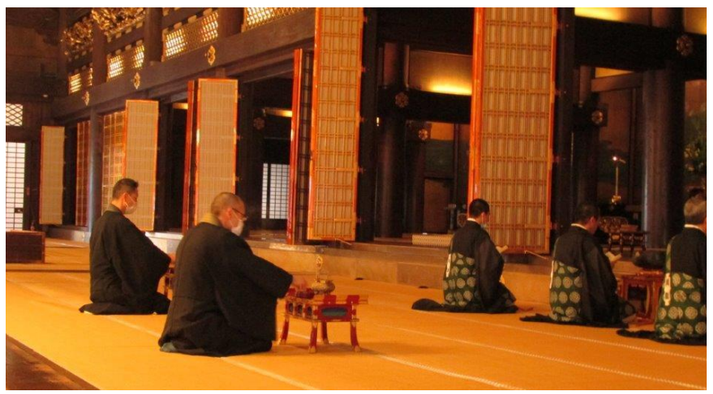
現在は、充分な感染防止の対策をした上で、少しずつ収骨の申し込みをお受けしているという状況です。現状本山では代行というのは考えておりませんが、今後感染の状況がどのようになるかにもよりますし、法要そのものがどのような形でできるのか臨機応変に考えていかなければならないわけです。代行ということの可能性が広がっていくことは無くはないのかなと思っています。

ただ、あくまで代行という形でお預かりしたということですので、コロナの感染の状況が明けましたら、代行でお預けいただいた皆様方には、本山の報恩講をはじめ法要へお参りをしていただきたいということも同時に思っています。

山内　実は私も代行を頼まれたことがありまして、ただその時は奥様のお骨を収めたいんだけど高齢で京都まで行けない、ということでした。他にもこんな事例があると思いますが、今後教区として代行を続けるのでしょうか。

保木　教務所へ手続きにこられた高齢の女性がいました。近所の方に付き添われながら、手を引かれて教務所までなんとか来られた。同じように本山まではとても無理なので、代行という形で収める、という方が何人もいました。他には、若い家族が地元に住んでいないなど家庭の事情で収めに行けないとか、収めようと思っていたけどなかなか行けずにお内仏に仕舞われていたのを持ってこられた方などがいました。

そういう事情がいろいろ見えてきまして、収めに行きたいのに行けないという思いにお応えしていくべきではないかなと思っています。原則はやはりご遺族が本山まで行っていただくことだと思います。当然そのこともきちんとお伝えさせていただいていますし、コロナが収まったら必ずお参りしてくださいとお伝えさせていただいています。その上で、なかなか行けないという方もいますので、今後も代行を年間４回程度実施していきたいと考えています。


御影堂の法要の様子

本山御影堂

それと、ときどきご門徒さんから大谷祖廟と本山のお骨収めはどう違うのですか、と尋ねられるのですね。小松教務所では、相続講金を今まで納めていただいている方には本廟収骨をおすすめしているのですが、相続講金を納めていない方もなかにいらっしゃることから、どのようにお応えすればいいものか、またどのような違いがあるのでしょうか。いかがでしょうか。

近松　どちらにしても結果としてお骨を収めるということにはなっているのですが、本廟収骨は先ほどから再々申し上げていることですが、まず相続講があるということです。どこまでいっても本山の護持。そして浄土真宗の教えを後世に伝えていく。

現代に生きる我々は、その場を整えていく。その趣旨に賛同いただいた方にご懇志をいただいている。そのお礼としてのお骨収めということになります。その場合７センチメートル四方の桐箱に入る分のお骨をお預かりさせていただいている。そして御真影の近くにお収めさせていただく。ご遺族の方には、お骨を縁（よすが）として本山へお参りいただいて、本山の佇まいの中で聴聞していただいている。またそのことをご理解いただいて次の世代へ伝えていく。このように人の集まりとしての相続講をつなげていくことが本山の収骨ということであろうかと思います。

一方で大谷祖廟というのは、親鸞聖人のお墓が間近にあるわけですから、一味平等という形で納める。これは宗祖のおひざ元へのお骨納めということが第一義としてあるわけです。宗祖のお骨の近くに我々も一緒に納めていく。そしてまた、遺族がそのことを縁としてお参りをしていくということになります。現状ではお持ちいただいたお骨全部をお納めいただいています。繰り返しになりますが、大谷祖廟の場合は、まず宗祖への思慕の念に基づくおひざ元へのお骨納めということがあるわけです。

山内　なるほど、本山と大谷祖廟の違いはわかりましたが、なぜ真宗本廟収骨なのか、ということですね。たとえば、お寺によっては納骨堂を据えているところもあります。それとどう違うのか。さらには、真宗門徒にとって本山とは、ということについて伺いたいと思います。

近松　真宗本廟というのは、御開山聖人の（※）御座所であるということです。これは大坂本願寺の頃、11代顕如上人と12代教如上人がご消息でたびたび使われたことばです。やはり聖人の御座所というのは唯一無二の場所であって、それを我々は本山と呼んでいるわけです。そこが我々の教えの根源と言いますか、親鸞聖人のましますところはひとつであって、教えというのは、この場所から伝わってくるということです。願いとすればそこにご門徒が集うことなんですね。ですから御影堂というのはひとりでも多くの方が集えるようにということで、非常に大きく造られていると思われます。それに比して、各地に別院であるとか寺院は関係性でいえば、本山のお手次をしていく。それぞれの場所で仏法をお伝えしてくださっているということです。そういう役割があるのだと思います。

ですから、真宗本廟収骨ということは、まずこの御開山の御座所を我々が大事にしていくということの表れでもあろうかと思います。それは浄土真宗の教えを後世へ伝えていくということにつながるわけですね。そのことを確かめていくことが相続講の願いだと思いますし、私たちにとって真宗本廟とは、ということを確かめていくということにもつながります。

それとは別に、各ご寺院の護持や、地域のご門徒のつながりを確かめる場として、各お寺があり、納骨堂もあるのではないでしょうか。

保木　部長さん、よくわかりました。今日お伺いしたことを、教区の皆さまにお伝えして、２０２３年にお迎えする宗祖の誕生８５０年と立教開宗８００年の慶讃法要には、小松から多くの門徒さんが参拝できるようにしていきたいと思います。

《終わり》

※御座所…尊い方がいる場所。したがって、唯一親鸞聖人にお会いできるところという意味。